



TITLE:

<書評>浅井優一著『儀礼のセミオ  
ティクス--メラネシア・フィジーに  
おける神話/詩的テキストの言語人  
類学的研究』三元社、2017年、  
5,741円+税、516頁

AUTHOR(S):

佐野, 文哉

---

CITATION:

佐野, 文哉. <書評>浅井優一著『儀礼のセミオティクス--メラネシア・フィジーにおける神話/詩的テキストの言語人類学的研究』三元社、2017年、5,741円+税、516頁. コンタクト・ゾーン 2018, 10(2018): 336-342

ISSUE DATE:

2018-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/232971>

RIGHT:

浅井優一著

『儀礼のセミオティクス  
——メラネシア・フィジーにおける神話／  
詩的テクストの言語人類学的研究』

三元社、2017年、5,741円＋税、516頁

佐野文哉

本書は、オセアニア島嶼国フィジーのヴィティレヴ島タイレヴ地方最北部に位置するダワサム地域で、約30年ぶりに開催された最高首長の即位儀礼を主な事例として、その儀礼をめぐって交わされたさまざまなやりとりと、20世紀初頭に植民地政府主導のもと作成された二つの文書の記号論的なつながりおよびその現代的な変化を言語人類学の視座から描き出す民族誌である。難解な学術用語が多数登場し読解に労を要する本書であるが、本稿では以下に示した本書の構成に従い、その解説を試みる。

336

序

- 第Ⅰ部 言語、意識、テクスト
- 第1章 ボアズ人類学と言語
- 第2章 儀礼のポエティクス
- 第3章 構造、歴史、存在
- 第Ⅱ部 文書と序列
- 第4章 フィジー植民地政策と文書
- 第5章 首長位の系譜
- 第6章 文書の体制
- 第Ⅲ部 神話と形式
- 第7章 儀礼、神話、文書
- 第8章 1930年との指標的類像性
- 第9章 知識とダイクシス
- 第Ⅳ部 儀礼、映像、憑依
- 第10章 儀礼とことばの民族誌
- 第11章 映像の体制

## 第12章 記号論的総括

### 結／コーダ

まず序では、コミュニケーションやテキストといったキーワードをもとに本書を貫く方法論的構えが示される。「文化の記述は、私たち人間という現象が生起する文化的で自然的なコミュニケーションの出来事が、どのようにして出来事として成立するのか、(中略) その記号の過程を厳密に記述・分析しうる理論的枠組みの構築を目指す試みでもなければならぬ」(8頁:以下、本書からの引用ページは数字のみ示す)と述べる著者は、「テキスト」を分析の基点に据える。本書でいう「テキスト」とは「特定の時空間に身を置く私たち人間にとって、認識可能となった全ての現象、特定の社会文化的コンテクストにおいて解釈可能となった経験的、語用的、コミュニケーション出来事一般」(10)のことであり、特定のコミュニケーションが意識化され「テキスト」となる過程＝「テキスト化」の過程を描き出すことが本書の目的となる。

序につづく第1部では、本書で援用される言語人類学の理論が整理された後(第1章)、その視座から儀礼(第2章)やメラネシア(第3章)を扱った先行研究が再検討される。まず第1章では、ボアズにはじまりシルヴァスティンに至る言語人類学の系譜が整理され、それらに通底する「意識化」という問題系と「テキスト化」という分析視座との関連性が説明される。アメリカ先住民諸語の調査を通して言語にはその使用者本人にとって相対的に意識に上りにくい側面があることを明らかにしたボアズの言語思想を引き継いだサピアとウォーフは、無意識的な言語構造およびその使用と、それを意識化するときの認識のズレが言語変容、ひいては文化変遷の根幹にあると主張した。この意識化という問題系をヤコブソンの言語理論と接合したのがシルヴァスティンである。彼はヤコブソンによる言語の「詩的機能」にかんする洞察をもとに、儀礼を「行為の詩」(47)と定義する。すなわち儀礼は、韻文(詩)に類されるその反復構造によって人びとの意識が集中しやすいものとなり、それゆえに共同体において前提可能性の高い文化的ステレオタイプとして広く共有される。ただしこうした反復構造は狭義の儀礼に限らず日常的な相互行為でも観察されるものであり、それは「なまの出来事」を社会文化的に解釈可能な「テキスト」へと範疇化＝テキスト化するように働く。著者曰く「シルヴァスティン以降の(記号論系)言語人類学では、こうした相互行為出来事の「テキスト化」(中略)が、文化変容の所在であると考えられている」(49)という。

第2章では、儀礼を扱った言語人類学的な研究が紹介される。従来の儀礼研究の多くは、儀礼を当該社会の世界観を反映するものととらえてきたが、そこでは儀礼がどのようなコミュニケーションの特徴を備えており、いかに宗教的／魔術的な力を喚起するのかについては不問に付されてきた。そうした課題に取り組んだのが儀礼における言語使用(儀礼スピーチ)を扱った研究群である。それらは、①儀礼スピーチにみられるパラレリズムが高い形式性を有したテキストを形成し、それによって「今ここ」ではない遠く離れた時空間(異界)を指示する力を喚起すること、②儀礼スピーチの「復唱」やそれを代理で伝える者などの存在が儀礼スピーチの表すものとそれが語られる「今ここ」のコンテクスト

との断絶やその間接性を明示し、儀礼スピーチの権威や神聖性を高めていること、③儀礼スピーチにみられる「模倣」や「憑依」などにおいては、発話者個人が指標される度合いが低くなり、それにより儀礼スピーチが権威づけられていることなどを明らかにしてきた。そこからいえることは、儀礼というコミュニケーションはコンテキスト依存性を縮減するような形式となっており、そうした形式性やコンテキストとの媒介性が儀礼というコミュニケーションの性格を再帰的に決定しているということである。

第3章では、オセアニアを扱った人類学的研究としてサーリンズ、トーマス、ストラザーンがとりあげられ、「テキスト化」という視座から再検討される。最初に検討されるサーリンズは、オセアニア社会の歴史の変容を、偶発的な「出来事」と、そうした出来事を意味化する「(象徴)構造」との二項対立的な弁証法でとらえようとした。しかし神話を唯一の「文化の所在」とみなすサーリンズは、語られる神話と、神話を引用して「今ここ」でなされていることの違いを理解しておらず、実際に「出来事」や「構造」が生起する相互行為の場が見えなくなってしまった。一方、「構造」の歴史的構築性を主張したトーマスは、サーリンズがオセアニアの「伝統」とみなす事柄が西洋との接触の過程で構築されてきたことを明らかにした。著者によると、これは「西洋／非西洋(フィジー)」という「対照ペア」(111)が分裂生成的に意識化され、文化的ステレオタイプとして「テキスト化」されていく過程に注目したものであるという。そしてこうした「テキスト化」の過程の基底にあるのが、ストラザーンの展開した「儀礼コミュニケーション過程論」(107)であると著者は主張する。

第II部では、現代のフィジー人社会の形成に大きな役割を果たしてきた『一般証言 (*Ai tutukuru raraba*)』および『氏族登録台帳 (*Vola ni kawa bula*)』という二つの文書に焦点を当てた分析が行われる。まず第4章では、植民地状況下でいかに現代フィジー人社会の基底が形成されてきたのかが「文章化」というキーワードのもと説明される。フィジーは19世紀後半にイギリスの植民地となったが、ときの植民地政府はニュージーランド・マオリの惨状をふまえて、フィジーでは先住民保護政策を推進した。政策のなかでフィジー人は伝統的な生活を維持することが推奨され、また国土の8割以上を占める「ネイティヴ・ランド」の所有者として規定された。植民地政府はフィジー人の伝統的土地所有形態を確定するために「先住民所有地委員会 (NLC: 以下、後身である「先住民所有地漁場委員会」についてもNLCと表記する)」を設置して地域ごとの慣習や社会集団、土地を所有する単位集団、親族関係、移住に関する伝承などを記録した。その際に作成されたのが『一般証言』と『氏族登録台帳』である。植民地化以前のフィジー人社会は集団・階層間の流動性が高く地域ごとの違いも大きかったが、NLCによる調査をとおして現在のような「家族 (*tokatoka*) <系族 (*mataqali*) <氏族 (*yavusa*)」という父系的階層構造が構築されるに至った。そこからわかるように現代フィジー人社会はNLCによる「伝統的」社会集団の「文章化」とその管理を起点として形成されている。

第5章では、調査地であるダワサム地域における首長位の系譜をめぐる対立についてNLCが作成した文書と関連付けながら説明される。ダワサム地域ではかつてダワサム氏族ラトゥ系族が首長を輩出していたが、現首長の祖父にあたる人物よりナサンギワ系族が

首長位を一時的に引き受けるようになった。現首長の代になりラトゥ系族最後の首長の一人娘から首長位の象徴であるタンブア（鯨歯）が授与されナサンギワ系族が首長位を正式に継承するに至るが、ラトゥ系族の子孫にももう一つの首長位の象徴である「首長のための土地」が授けられたために混乱が生じた。通常フィジーではヤングナ（カヴァ）を飲む即位儀礼を経て正式な首長となるが、こうした事情を背景の一つとして約30年ものあいだ現首長の即位儀礼は実行されることがなかった。即位儀礼の不履行の背景には他氏族間の対立もある。以前、現首長の即位儀礼が計画された際、デライ氏族ナワライ系族に対する連絡が遅れたことを理由に、彼らが儀礼への参加を拒否し儀礼が開催されなかったという出来事があった。ナワライ系族はかつてデライ氏族の筆頭系族であったが、NLCの調査の際に誤って別系族が筆頭系族として登録されてしまい、それが原因で儀礼開催の連絡が遅れたのだ。こうしたNLCが作成した文書を起点とする氏族間の対立や「ズレ」の意識は、後に即位儀礼の開催を方向づけるコンテキストを形成することになる。

第6章では、『一般証言』と『氏族登録台帳』の記述形式やそれらがフィジー人社会で果たしてきた役割について分析される。『一般証言』はNLC主導のもと氏族の代表者によって語られた土地への移住の伝承や系族間の関係などにかんする記録である。ダワサム氏族にかんする『一般証言』の記録をもとにその記述形式をみると、形式性の高い統一的な様式で書かれていることがわかる。著者の分析によると、こうした統一的な記述様式のなかで「ダワサム氏族」が「語用的に生成」（195）されたのだという。この『一般証言』がNLCにより厳重に保管され、作成当時からまったく変更が加えられていないのに対して、『氏族登録台帳』は『一般証言』により示された集団範疇へ構成員を随時登記していく戸籍抄本として作成された。フィジー人は新生児が生まれると首都スヴァのNLCのオフィスに赴き『氏族登録台帳』のなかの父方の「地域・村落」「氏族・系族・家族」の部分に新生児を登記することが義務付けられている。この『氏族登録台帳』は『一般証言』で示された集団範疇を、それを登記する者に繰り返し確認させる「儀礼的基点」（199）となっているが、それは同時に『一般証言』に記された集団範疇と各々の集団範疇認識との「ズレ」を再確認させる契機ともなっている。

第Ⅲ部では、即位儀礼の不履行に不満を抱いていた人物が中心となり儀礼の開催が画策され、実際に儀礼が開催されるに至るまでの経緯が記述・分析される。まず第7章では、即位儀礼の開催を画策した人物らが儀礼開催の正統性を根拠づけていく過程が描かれる。儀礼を画策した中心人物であるナザニエリが族長を務めるヴォニ氏族ナンボロ系族は、かつて首長を即位させる儀礼的義務を有する筆頭系族として首長と同じドゥリティ村で暮らしていたが、NLCによる調査の際に誤って別系族が筆頭系族として登録された結果、その事実を憤慨した当時の族長を中心に現在のデラカンド村に移住してきた。ナザニエリは2008年ごろから儀礼の開催を画策するが、当初彼の訴えは現首長とその側近ら（現在のヴォニ氏族の筆頭系族を含む）によって反対されていた。その後、現首長は儀礼の開催を承諾するが、側近らは依然として反対し続けていた。そんななか地域内の他氏族からの賛同を得ようと画策していたナザニエリは、祖先神の啓示に従って訪れたナタレイラ村のデライ氏族ナワライ系族（第5章参照）の族長のもとでダワサム地域の首長位の起源にかん



する語りを聞く。それによると最初の首長をダワサム地域に連れてきたのはデライ氏族ナワライ系族の先祖であり、その首長の即位儀礼を主導したのはヴォニ氏族であったのだという。文書を起点に形成された現在の集団の序列に「ズレ」を感じていたナンボロ・ナワライ両系族の「神話的邂逅」(249)は、彼らにとって自分たちが儀礼開催を主導する正統性を根拠づけるものと受け止められた。そして他氏族の賛同のもと反対派を排除して進められた即位儀礼の準備のなかで、儀礼開催賛成派＝「古き (*makawa*)」「正しき (*dodonu*)」「土地の本当の民 (*itaukei dina ni vanua*)」／反対派＝「新しき (*vou*)」「誤った (*cala*)」「よそ者 (*tamata vulagi*)」という対立図式が形成されるに至った。

第8章と第9章では、儀礼開催予定日の約1週間前に政府役人を交えて開催された儀礼開催の是非を審議する会議がとりあげられ、そこで儀礼開催賛成派がいかに自らの正統性を主張し儀礼開催をとりつけるに至ったのかが記述・分析される。政府役人を介して賛成派と反対派がそれぞれ意見を述べるという枠組みのもと進められたこの会議において、反対派は、即位儀礼開催についての長老会議が首長の暮らすドゥリティ村ではなくデラカンド村で反対派を排除しながら進められたことや儀礼自体もデラカンド村で計画されていることなどを理由に儀礼開催に異議を申し立てた。それに対して賛成派のナザニエリは、前章で明らかになった伝承を根拠に自分たちが主導してデラカンド村で即位儀礼を開催することの正統性を主張した。この際に彼は「上 (*cake*) / 下 (*ra*)」といったフィジーにおいてある一定の文化的価値づけを喚起する語彙のペアなどを駆使しながら発言することで「賛成派＝土地の民／反対派＝よそ者」という構図を提示して賛成派が画策する儀礼の正統性とNLCが保管する文章の偽製性を指摘した。最終的に政府役人はナザニエリの主張とNLCが保管する「文書」とのズレを認識しながらも儀礼開催を「承認」するに至るのであるが、著者の分析によると、それは詩的な一貫性や結束性を有したナザニエリの主張に覆しがたい「真実らしさ」を政府役人が見出したからであるという。

第IV部では、即位儀礼の場面(第10章)と、その一部始終を記録・編集して作成されたDVD(第11章)について詳細に分析されたうえで、これまでの分析に関する記号論的総括(第12章)が述べられる(なお本稿では議論の繰り返しを避けるため、第12章と結論にあたる「結／コード」については解説を省略する)。まず第10章では、2010年4月15日から17日にかけて開催された即位儀礼の様子が詳細に記述・分析される。この3日間におよぶ儀礼は①首長として即位する人物を居住村であるドゥリティ村からデラカンド村まで連れてくる場面からはじまり、②デラカンド村に到着後ブレ(即位儀礼を行うために建てられた家)で執り行われた即位儀礼を経て、③首長をドゥリティ村まで送り届けた後に行われた「住まわしの儀礼 (*veivakatikori*)」で締めくくられた。①～③で行われた儀礼スピーチを分析すると、それらは②における「ピロの譲渡 (*solu ni bilo*)」、すなわち土地の民が首長にヤングナを飲ませるといふ儀礼的出来事を頂点に構成されており、また空間的にも沿岸部のドゥリティ村から内陸部のデラカンド村のブレの上座(首長が座る位置)に向かって象徴性が徐々に高まるように分節化されていた。①～③のすべては即位儀礼を画策した賛成派が解釈した「土地の過去」を「今ここ」で再現するものとして進められており、一連の儀礼を経た結果、文書によって秩序化されていた土地は文書以前の過去

のレプリカとして再秩序化されるに至った。

第11章では、NLCと同じくフィジー総務省に属するフィジー言語文化研究所（IFLC）の職員2人によって作成されたDVDについて考察される。この約100分のDVDは上記の即位儀礼を記録・編集して作成されており、主なシーンの転換部にはIFLCの職員による標準フィジー語のナレーションが吹き込まれているが、ナレーション以外の儀礼スピーチや村人たちの会話はすべて地域方言がそのまま記録されている。即位儀礼がNLCの文書と矛盾する人びとによって主導され、首長が住まうドゥリティ村とは異なる村で開催されたことについては、「土地の決定」のもと、植民地化以前に行われていた即位儀礼が踏襲されている」という内容のナレーションが挿入されることでその正統性が示されている。なおナレーションはヴォニ氏族ナンボロ系族の男性によって監修されているが、DVDの著作権はフィジー総務省に属している。このように「文書」の内容と矛盾した儀礼の様子が記録されDVDとしてアーカイブ化されたという事実は、現代フィジーにおける「文書」の権威の失墜を表している。すなわち「文書」の記述が人びとの経験世界の外部に位置していた過去とは異なり、「文書」が提示する社会集団の秩序がある程度浸透した現代フィジーにおいては、「フィジー人」をテキスト化する「メタ・テキスト」は「文書」そのものではなく、「文書」を通してテキスト化されたフィジー人自身によって織りなされる語りや儀礼といった「相互行為的テキスト」（437）へと移行しており、その意味において「土地の民」による相互行為それ自体に超越的な契機が「転移」しているといえる。

以上が本書の概略である。植民地状況下で作成された文書と現地で交わされたさまざまなやりとりの詳細な分析によってフィジー人社会の記号論的変遷を描き出す本書は、評者のようにフィジーをフィールドとする人類学徒のみならず、記号論的な社会文化研究に関心をもつ人びとにとっても示唆に富むものであろう。

その一方で評者にはいくつか疑問に感じられた点もあった。たとえば「テキスト」を意識化された出来事と定義したうえで、特定のコミュニケーションが意識化＝「テキスト化」される過程の解明をその目的に掲げる著者は、本書において、即位儀礼の賛成派のリーダーたちを中心としたやりとりや、彼らを中心に執り行われた即位儀礼の場、それらを記録したDVDなどを対象とした分析を展開しているが、そこでは公的になにかを語りうる人びと、いわゆる社会的な「エリート」による語りや言説の分析に終始している。そのため著者がいう「超越的な契機」、すなわち文化変容の所在は社会的なエリートによる語りや言説に限定されてしまっているかのような印象を受ける。しかし「文化」をその根底で支え、駆動しているのは、社会的なエリートによる語りや言説だけではなく、さまざまな人びとによる、前意識的な（すなわち人びとが必ずしも明示的・意識的に語りえない）ふるまいを含む日々の相互行為の総体であり、それらによってかたちづくられる関係性であると評者は考える。そうだとすれば、「人びとの「相互行為的テキスト」に超越的な契機が「転移」している」という著者の分析が真実だとしても、はたしてそうした「超越的な契機」の所在は、著者が分析対象としたようなエリートによる明示的・意識的な語りの形式やそこで使われている言葉の意味、およびそれらから類推される語用的効果のみ

に帰されるべきものなのだろうか。

ただし、評者が感じたこうした疑問点は本書の「厚い記述」の前では些末なものにすぎないかもしれない。緻密なフィールドワークに基づいて書かれた本書は、本稿で汲みつくしきれない示唆に富んでいる。ぜひさまざまな人びとに本書を手にとっていただきたい。